クロスロード新聞

第27号

2010年3月10日

クロスロードのつどい In 高知 詳報

発行元：108-8345　港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部　吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局

クロスロードのつどい in 高知 詳細レポート

大好評のうちに終了したクロスロードのつどい　in　高知、詳細レポートが続々登場しています。まずは、黒潮町の友永さんに登場して頂きましょう。

■期待以上の収穫！～ファシリテータの集いin高知～

私にとっては３年ぶりの参加となった今回の集い。翌週に控えた３本の防災講座（社協等が主催の高齢者向けサロン）のネタを得ようとの目論見と、新たな出会いや再会（勝手ながら若干の同窓会気分）に期待しつつ、ちょっとだけ準備をお手伝いせていただきました。

参加申込み者が徐々に増えていく様、３年ぶりにお会いする方、お名前だけは一方的に知っている有名な方、高知大生、初めて見るお名前、宮城、福島、静岡・・・全国各地から集まる面々（龍馬伝効果か!?）・・・少し違った立場でかかわることで、集いへの期待感は徐々に高まり、わくわくしたことでした。

今回の報告者もタレントぞろい。各地で活動している当事者から、場の様子や思いを直にお伺いでき、多くの学びがありました。見ると聞くではなんとやら、「あっあれ使える」「これいただき！」のオンパレード！おまけにプレゼントコーナーもありとは・・・これぞ、集いの魅力。やはり、生がいい。

さて、当日の報告者の内容は別にあると思われるので割愛し、集いで得たこの収穫をどう生かしたのかや雑感などを以下に報告します。

■理想のプログラム？誕生～頭と体の体操で備える～

クロスロードと出会ってから、これまで約３０回実施してきたサロンやミニデイでの防災講座（クロスロード新聞第８号参照）にちょっとした運動を取り入れたらいいんじゃないか？と、ぼんやり考えつつも、「歩一歩たいそう」と結びついていなかったのが、今となっては不思議なくらいです。

今回の集いで「歩一歩たいそう」に出会い、前半にクロスロード（時節柄火災ネタ）、後半に「歩一歩たいそう」というセットにして“頭と体の体操で備えよう”を歌い文句に営業活動をすることにしました。

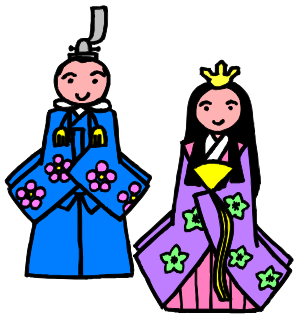
集いの翌日に急遽作ったプログラムのため、地区担当の保健師（後輩）と打ち合わせもできぬまま現場に乗り込み、「歌え」と先輩の命令に服従させ、また、参加した高齢者たちには「高知県内でみなさんが初めてですよおぉ！」と未確認の付加価値を押し付けながら、なかば強引に実施したことでした。（写真参照）

力技ながら、結果として生まれた双方向の場の空気感。求めていたカタチになった気がします。（次ページへ続く）

目次

つどい　in 高知 詳報　1 -5
歩一歩たいそうに 新バージョン?　3
先進地調査に 行きたい！！　5
ソナエーター(14)　6
こんなところに 心理学（２７）　7
講演が上手に なるには　7
ファシリテータ 認定！　8
横浜市研修で クロスロード　8

クロスロード次号のご案内
発行予定日：
2009．4．1．
衛生管理にクロスロード！



責任編集
- チームクロスロード
- クロスロード・サポーター
- SPECIAL THANKS:
  高知県地震・防災課
  小溝智子（漫画企画）

友永さんのレポート(続き)

■健康づくりこそ防災～超高齢社会の中で～

　サロンが終わった後も「♪もぉ～しも地震が起きたならぁ～♪」と口ずさむ声が聞こえたりと、予想以上の反応でした。私をはじめ保健師や社協の事務局員ともに「入れ食いや！」と感じ、参加者やボランティアのスタッフの方みんなが楽しめる場となりました。
　表面的には頭と体の体操というプログラムなのですが、クロスロードをきっかけに、自分の意見をみんなに聞いてもらうこと、ご近所の方の話を聞くこと、地域の備えに話題が広がること・・・頭と体を使って楽しいひと時を過ごしながら地域社会のことを考えることもできている。これは心の体操にもなると私は考えています。
　健康とは「身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態」であるというWHOの定義からすれば、まさに真の健康づくりの場になるのです。
　特に高齢化社会の進展が日本の最先端を行く高知県にとって、高齢者対策は容易な問題ではありません。高齢化が進み、心身ともに虚弱となり、そのうえ社会から孤立する方が増えるということは、災害時要援護者対策が肥大化することですから、なんとか健康を維持してもらう必要があります。「ピンピンコロリ」という言葉があるように、死ぬまで元気でいられる高齢者を増やすこと、せめて今ある機能を維持してもらうこと、社会との接点を持ち続けてもらうことが災害時要援護者対策の鍵となります。（要援護者の範囲から「高齢者」というカテゴリーが無くなることが理想）
　高齢者自身もそこは心得てくれているようで、口には出さずとも、“楽しんでいる”様を見れば、そこに「健康」に対するニーズがあることは明らかなのでした。そして「クロスロード」＋「歩一歩」が、大きな役割を果たすプログラムになったことを実感できたのでした。

「はい」と「いいえ」でクロスロード

■楽しむ防災について一考～本当の楽しさとは～

　「楽しむ」というキーワードが出たので少し雑感を。ゲーム感覚で学ぶクロスロードや高知県における「あそぼうさい」などに見られる楽しみながらの防災には２つの意味あるいは尺度があると私は考えています。
　１つは、受け取る側（学ぶ側）が楽しみながら心を開いて防災知識を吸収し、無意識に防災意識を高めるという、本来の啓発という意味。
　もう１つは、伝える側が本当に楽しんでいるか？ということ。実は後者が重要だと思うのです。
　理由は、悲惨な災害現場における知識や経験（場合によっては知識だけかもしれない）など、どのように伝えようか？と悩んだ挙句、「楽しむ」という、言うなれば“変化球”を用いるからです。ややもすると暴投になってしまう「思い」をしっかり受け止めてくれたときこそ、真に楽しいのでしょう。伝える側と受け取る側の真摯な関係がそこにあればこそ、場は本当の意味で楽しい。要するに、あてずっぽうに放り投げていないから、ボールはちゃんと受け止めてもらえるのです。
　さて、今回のファシリーテータの集いで、かの“ミスターダック”こと呉市の林さんから迷い（？）の発言がありました。楽しむ防災に少しカベを感じているというような主旨だったと思います。
　おそらく、林さんは本気で“楽しい”のでしょう。それが、あまりにも楽しすぎて「これでいいのか」と「気が引けた」に違いない。けれど、彼が“伝えるために”これまで費やした努力からすれば、気が引けるもしくは怖いくらい楽しいのは当然なんだと思います。いやはやうらやましい域の感覚です。

■終わりに～クロスロードと集い～

　余談になりますが、真理や合意を“点”とするならば、もしもそこを目指すことのみが目的のゲームだったら「クロスポイント」になっていたのかもしれない。終わらない対話であるこらこそ、クロスロードなのでしょう。なんたって“道”ですよ“道”。
　言ってみれば防災道。おそらくこの道はクロスロード・ネクストで指摘されているとおり、本当に終わりの無い旅なんでしょう。
　そして、その道を歩いていると同じ方向に歩く人と出会う。追いついたり、追い越されたり。時にはみんなで休んだり。それがファシリテータの集い・・・集いの帰り道、ふとこんなことを考えたことでした。
　さて、次回の集いは神戸の予定とか。みなさん、クロスロードの故郷に集いましょう!!

（高知県黒潮町　友永　公生さん）

クロスロードファシリテータの集いin高知に参加して

平成２１年12月5日朝7時西明石。ちょっと雨。
神戸市の柿本さんと浜さんと原さん（私の後輩）、そして私はマイカーで明石大橋を渡っていざ高知へ！
そう、クロスロードファシリテータでもない私と原さんが、クロスロードファシリテータの集いin高知に参加したのです。
実は昨年の神戸に初めて参加しました。衝撃でした。
柿本さんとは自治体職員有志の会をとおしてお付き合いいただいていましたので、神戸でなんだか面白そう…ということで参加してみました。
そこで、ちょっと体験があり、その魅力に「やってみたい」と強く思うようになったのです。ほんの少しだけの体験で…。
そんな私が主任児童委員の広域での集会に「子育てクロスロードゲーム」をやろう！となぜか単純に思ってしまいました。今考えれば無謀です。なんせ８０人のクロスロードなんですから、しかも、自分自身やったことがない…。
柿本さんに「播磨町で子育てクロスロードをしたい」と懇願し浜さんを紹介していただき実現しました。もちろん、やってよかった！参加者も大満足されました。
前置きが長くなりましたが、まず、「クロスロードやってしまった」ということから図々しくも後輩まで連れてのin高知へ参加したのです。
軽快な柿本さんの司会でいよいよ始まりました。
「クロスロードネクスト」クロスロードが日々進化しているのがよくわかりました。
高知県教育委員会　岡田直子さんからは、教職員研修の現場から、学校での防災教育としての子どもたちへの指導の指導方法の発表、呉市消防　林国夫さんからは、防災ダック表彰される！とのご報告、呉市社会福祉協議会の近藤吉輝さんからは、歩一歩たいそうの方言編の紹介、わがまちの言葉でのリズムは軽快です。仙台市の田中勢子さんからは、田中さんのクロスロードへの熱い思いがまちづくりへと繋がっていくパワーが感じられました。楽しんでおられる様子が印象的でした。

そして、神戸クロスロード研究会　浜尚美さんからは、私のまち播磨町で開催していただいた主任児童委員研修会の様子を含めて、子育て支援をクロスロードでと、ステップアップ、まさにネクストな発表。最後の締めは高知県庁小溝智子さんから、ご自身のマンションでの防災活動にからませての高知県の南海地震への防災について、思わずわが町の防災意識の低さに愕然としました。また、現在環境の部署へ異動されていますが、持ち前のアイデアと突破力であたらなチャレンジを楽しみにしています！
クロスロードゲームを基礎にいろんなアレンジを加えカタチを変化させながら進化することは、他の手法ではなかなかないことだと思います。各地でその目的を達成するために工夫したクロスロードが生まれてきている感覚を持ちました。
最後に、小溝さんに「なぜ、予算が伴ういろんなグッズを作ることができるのですか？」と直接お聞きした答え「チャンスはいつやってくるかわからない、そのとき、すぐにこれをしてみたい、と出せるように…実現したいことは、チャンスを逃さないように準備しておくこと」と。さすが、備えのプロです！

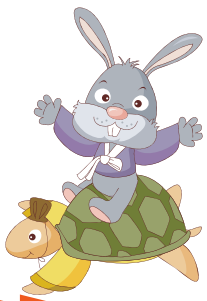
この集いにはプラスアルファのお楽しみもありました。翌日は 高知市名物日曜市～種崎地区波避難センター（津波避難ビル）、桂浜へ高知市の今西さんをはじめ高知の方々に大変お世話になりました。懇親会も最高！各地で開催するのもいいなぁと、何が目的かわからなくなりそうな素晴らしい高知でのクロスロードファシリテータの集いでした。

矢守先生、吉川先生をはじめお世話いただきましたみんさま、参加させていただきありがとうございました。

私も「クロスロードネクスト」考えてみたいと思いました。

（兵庫県播磨町　上田　淳子さん）

番外編～「歩一歩たいそう」に13番候補登場！



つどいでは、歩一歩たいそうを紹介された呉の近藤さんに「高齢者向けに『オレオレ詐欺』防止の歌詞はないのですか」という質問が会場から出ました。
そこへ登場したのが、上田さんのレポートにも登場のアイディアウーマンの小溝さん。即興で「オレオレ詐欺」防止の歌詞を作ってくださいました(右参照)。
現在12番まである歩一歩体操の13番候補です。メロディーはおなじみ「うさぎとかめ」です。
あとは、体操ができるのを待つのみ?！

もしもオレだと名乗ったら
相手の名前を確かめて
オレオレ詐欺に遭う前に
老後のお金を守りましょう

縁の下の力持ち！高知市の浜田さん、武内さんから

昨年１２月５日（土）午後に開催した「クロスロードファシリテーターの集いｉｎ高知」は，参加者数２６名，懇親会も１９名の方が参加し大盛況でした。師走の慌ただしい時期にもかかわらず，ご参加いただいた皆様にお礼申し上げます。北は仙台や福島など遠方から，四国の高知という交通事情の悪い開催場所にもかかわらずご参加をいただきまして，西日本の枠を超えた大会となりました。

会の進行は神戸クロスロード研究会の柿本さん。会が始まる直前に，司会をお願いしたにもかかわらず，さすがの「芸達者」というべきか・・・この瞬間，会の成功は決まっていたのかもしれません！！

矢守・吉川両先生を含めた６組８名の発表は，実践に基づくものやコンテストで受賞をされたもの，またまた体を動かすもの（ぼうさいダック・歩一歩たいそう）などバリエーションに富んだ内容でした。高知県教育員会の岡田さんからは，教職員研修でのクロスロードや子どもたちへの指導の発表がありました。発表のテンポやシンプルな画面構成など，普段から子どもたちにいかに分かりやすく伝えるかを知り尽くした，さすが教員だなあと感じました。呉市消防の林さん，呉市社会福祉協議会の近藤さんからはぼうさいダックと歩一歩たいそうが発表されました。パワフルな呉市のお二人で会場は盛り上がり，歩一歩たいそうは参加者全員で体を使って歌やおどりで表現しました。突然のふりで体操のモデルを快く引き受けてくださいましたわしん倶楽部の田中さん，ありがとうございました。仙台から参加いただきました先程のモデルわしん倶楽部の田中さんからは模造紙や写真，新聞記事を使い，とても熱のこもった発表をされ，神戸クロスロード研究会の浜さんからは，活動のあゆみや新しい分野の開発の発表がありました。そのなかで現在の部署が環境部門ということで，クロスロードを使ってみたが，防災のように切迫感がなく，いまひとつ盛り上がらないという問題提起がされました。最後に高知県の小溝さんからは過去の南海地震やマンション住人としての取組などの紹介がありました。

意見交換の部では，林さんから被災地（神戸）で防災をテーマにした話をするとき，ゲームやあそびを取り入れた手法を用いた場合，災害の被災者の立場からいえばふざけているのではないかと指摘され，悩んでいるという問題提起がありました。林さんは，被災地の現場を知らないわけではなく，消防職員として被災地に入り，災害現場のあまりのすごさにおどろき，また，無力感も感じた経験の持ち主です。それでも，今被災地に入って話をするときは配慮をされるとのことでした。矢守先生がマイクを握り，防災を語り伝えることはいろんな手法や伝え方があってもいいのではないかと言われました。子どもたちや参加者に分かりやすく，また，飽きずに聞いてもらい，体験や理解そして自分のものにしてもらうためにはいろんな方法があり，今後もみんなが試行錯誤をしあい，それが今日のこの場なのかなと感じました。次元は違いますが，私も起震車を使った揺れ体験で子どもたちが列にならんで楽しみに待ってくれるのはいいんですが，遊園地の乗り物のように，最中の揺れを楽しみ，終わった後「全然こわくなかった」やあげくのはてには「楽しかった」などと言われることがあります。その時は，こういうことでいいのかなと思ったりもしていました。矢守先生の話を聞いて，少し楽になり，今後はよりいっそう子どもたちに災害（この場合は揺れの中のリビング）をイメージしてもらうようアナウンスに努めることを決意しました。

そして，あみだくじのお楽しみ会があり，矢守先生から著書多数のプレゼントが参加者にありました。

その熱い雰囲気のまま，懇親会へと流れていき（会場は昼の部のビルのとなり土佐の家庭料理の店「草や」でした）またまた意見交換で盛り上がりました。

懇親会では、クロスロード問題(右ページ参照）で盛り上がりました。ここでもクロスロードです。

土佐の人間は迷わずＹＥＳを選ぶので，高知ではクロスロードにならないか？（笑）

今回の参加者の答えは、全員一致で「Ｙｅｓ（呑む）」だったような記憶が・・

この後は、呉チームの「Ｄｕｃｋ　Ｙｏｕ」へと番っていきました。

最後になりましたが，高知での「つどい」の開催にあたり，ご支援いただきました矢守・吉川両先生，発表をされたみなさま，会場準備をお手伝いいただきました高知大学の楠本さん，坂井さん，松尾さんどうもありがとうございました。みなさん，ぜひまた高知へお越しください。

(高知市危機管理室　　浜田　太郎さん
　　武内　昭憲さん）

歩一歩たいそうは、DVD付きで解説

懇親会でクロスロード問題はこれだ！

日々「分かれ道」があるということ，「クロスロード」がとても幅広く活用できることを、土佐の高知の風習にちなんで紹介させていただきました。

～今日は「クロスロードのつどいｉｎ高知」の懇親会。
あなたは、県外からの参加メンバーです。宴も盛り上がり座が乱れ始めたその時・・・地元のＴ君から、「返杯（へんぱい）」の掛け声とともに杯（さかずき）を渡され，酒を注がれました。杯はどうやら先程までＴ君が飲んでいたもの。折しも「新型インフルエンザ」が大流行中であり、誰が感染しているかわからない状況です・・・
あなたは，その杯を受けますか（呑む）？受けませんか（呑まない）？～

「返杯」とは、高知の酒飲みの儀式（？）で基本は、次のとおりです。（日本酒編）
①自分の杯で相手方にお酌をする。（この場合、必ず自分の杯を使用しておくこと。そうでないと「杯が冷たい！」とかの突っ込みが入ります。）
②注がれた人は、ぐっと杯を空け、その杯で注いでくれた相手にお酌をします。
（この際、杯の空け方次第では「まあ、もう１杯」と杯を返させてくれないことがあります。）
③話しながら、①②、①②、①②、そのうち②①、さらに違う相手の杯も参戦してなにがなにやら・・・・

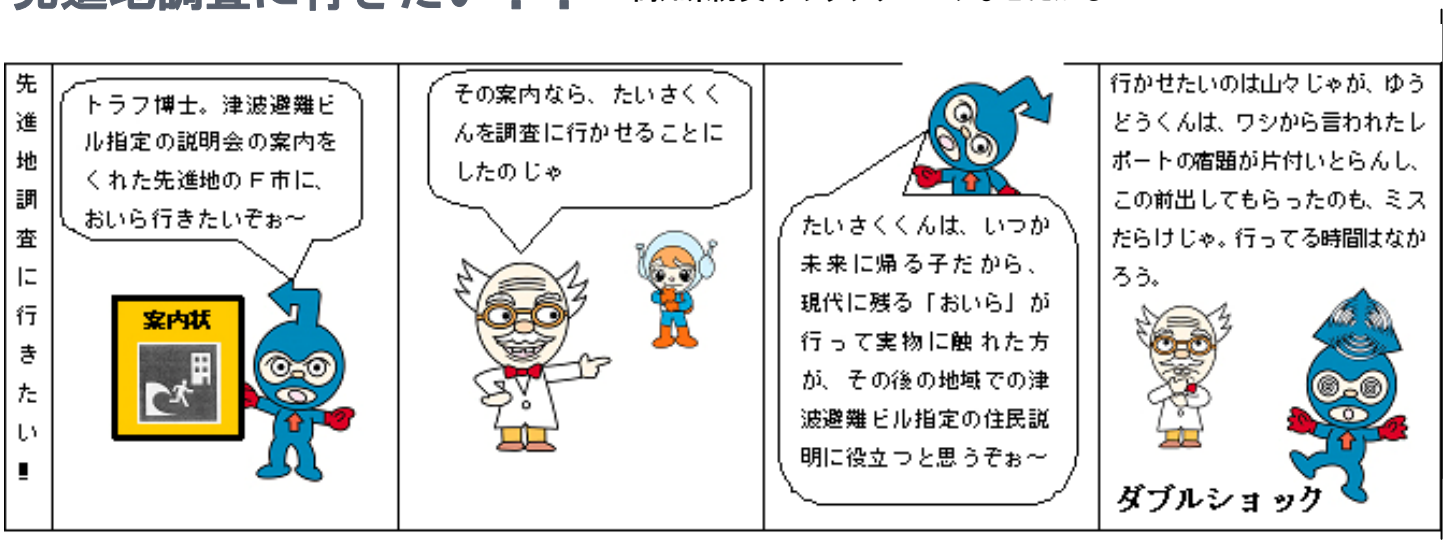
日本酒と杯、あるいはビール瓶とグラスを持ちふらふらと歩いていて、誰かと目があったらとりあえずそこにすわり、「まっ１杯」の繰り返し。
初めて会ったとか、そんなことは、関係なく，名刺代わりに杯やグラスを差し出し、共に語り、飲んでお互いを理解しあうこと。それが「返杯」です。
こうして、高知の夜は更けていきます。

さあ、皆さんの答えは、
Ｙｅｓ（呑む）ｏｒ　Ｎｏ（呑まない）

呉チームの「Duck You」は、これだ！→

先進地調査に行きたい！！

高知県防災キャラクター©やなせたかし



ソナエーター（14）私はサーファー？ソナエーター？

高知市危機管理室の今西です。昨年１２月に開催した「クロスロードファシリテーターの集いin高知」では皆さんに大変お世話になり、ありがとうございました。

さて今回、私がソナエーターということでこの原稿を書いていますが、果たして私がソナエーターでいいのか？と思いながらの原稿ですので、どうか厳しい突っ込みは無しでお願いします。

私はサーフィンが趣味で、休日は高知市内のポイントはもちろんのこと、四万十市や県外にも波を求めて出かけています。サーフィンができる？できない？は、波の有無や大小はもちろんのこと、潮周りや風の状況、ポイントの地形等様々な要因があり、単純にそこに海があるからという訳にはいきません。

近くのポイントでのサーフィンなら、サーフボードとウェットスーツ、水（湯）を浴びるためのポリタンク等に加え３０分のドライブがあればＯＫですから、小さな車（場合によっては二輪でも）でも十分です。

しかし、遠くのポイントで波の良い時間帯（潮周りさえ良ければ早朝がベター）により長い時間サーフィンしたり、近くのポイントでも１日中海で過ごしたりするには、ワンボックスカーなどの大きな車が重宝します。例えば、片道が２時間を越えるポイントでは、前日出発深夜着就寝or未明出発早朝着→入水→昼食（昼寝）→入水→帰宅。連チャンコースではこれに加え、夕食→宿泊→早朝→入水ということになります。これでは宿代や食事代、また燃料代も馬鹿になりませんから多くのサーファーは、ワンボックスカーに手を加えて、ベッドスペースやボード等のスペースを確保し、さらにキャンプ道具等を積み込んで数人で遠くのポイントへ出かけることが多いようです。

このような状況の中、サーフィンだけでなく車での自由な旅行も大好きな私は、８年間の貯金と少々の借金によりワンボックスのキャンピング仕様の車を購入しました。車の装備としては、上下２段のベッドスペース（１つは座席兼用のソファベッドです。）に、２バッテリー＋コンバーターでＡＣ電源を確保、カセットコンロ＋２０ℓのポリタンク×２＋シャワー（小型ポンプ）に断熱材といったところです。ベッドスペースも自宅のそれより広く、夏場は網戸＋うちわ、冬は寝袋＋湯たんぽで快適に週末を過ごしています。

（じつのところ夏は少々キツイですが・・・）

さらに、キャンプ用の調理器具や木質燃料（チップの再利用製品が主燃料、点火は良く燃える松ぼっくりで）が使えるかまど、ランタン（LED，ガス）、食料（僅かですが・・）等を常時積んでいます。

友人に「もう、家（うち）はいらんねえ！」「いつ（家を）追い出されたちかまんねぇ！」と冷やかされ、「そうそう、おまんらぁの言うとおり。喧嘩しても行くく（寝る場所）があるき!」と答えて気がついたことが・・・「もしかして、備えたことになっちゅうろうか？」

（「　　」内は土佐弁です。龍馬伝等を参考に発音してみてください。）

趣味のための車や道具がいつのまにか、災害（家庭内も含む）が起こっても活用できる車になってしまましました（おお!これが生活防災か・・・）。

車が大きいためあちらこちらには駐車できないことと、装備の関係もあり燃費があまり良くないことを除けば、非常に頼もしいこの車。皆さんも、いかがですか？

（高知市危機管理室　今西　剛也さん）

下段にはこんな装備が！！

こんなところに心理学(27)：体験して学ぶ効果

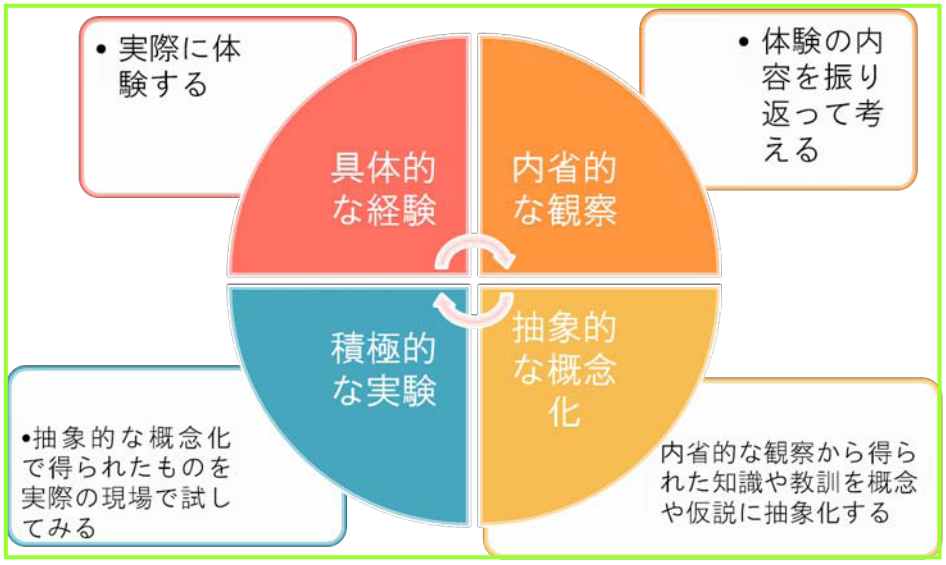
「聞いたことは忘れる、見たことは覚える、やったことはわかる」というのは、古い言い伝えだそうですが(孔子や老子のことばというのは俗説)、体験して学ぶ(体験学習)ことの重要性を指摘するときにしばしば引用されます。「百聞は一見にしかず」ということわざも自分の目で見ることの重要性を言っています。このように体験学習が注目されるようになった背景には、20世紀初頭に、哲学者のデューイ（Dewey)が、学習における自発的な学びを重視したことに始まっています。彼は、‘Learning by doing’（ラーニング・バイ・ドゥーング：することによって学ぶ）という考え方を示しました。

では、具体的に、体験することが学習にどのようにつながっていくのでしょうか。ここでは、コルブ（Kolb)という体験学習の専門家が呈示しているモデルをご紹介しましょう。コルブのモデル（右下の図）によれば、体験学習は4つの段階を踏むことになります。まずは、実際に体験する段階(具体的な経験)です。その経験をもとに、自分の中でその意味を考えるのが「内省的な観察」です。ここまでで具体的な体験の内容を振り返った後に、その観察から、一般化をしたり、自分なりの仮説を作ったりする段階が続きます(抽象的な概念化)。最後は，抽象化した経験を、実際の現場で当てはめて試す、という段階になります。さらに、この実験に基づいて具体的な経験がなされ、、、というように，この4段階は、体験が学習につながる、終わりのない循環的な過程なのです。この過程を繰り返すことによって、人は体験から学習することができるとコルブは考えているのです。

クロスロードでいえば、ゲームをプレイすることが具体的な体験にあたります。そして、ゲーム中の他のプレーヤと対話しながら考えることが内省的な観察にあたります。その後、災害対応ではこの部分が大事なのだとか、手順を考えてみるとか、様々な教訓を得る段階が抽象的な概念化にあたります。そして、次の災害や類似の現場で、クロスロード体験で得られた自分なりの仮説を試してみること、それこそが積極的な実験です。

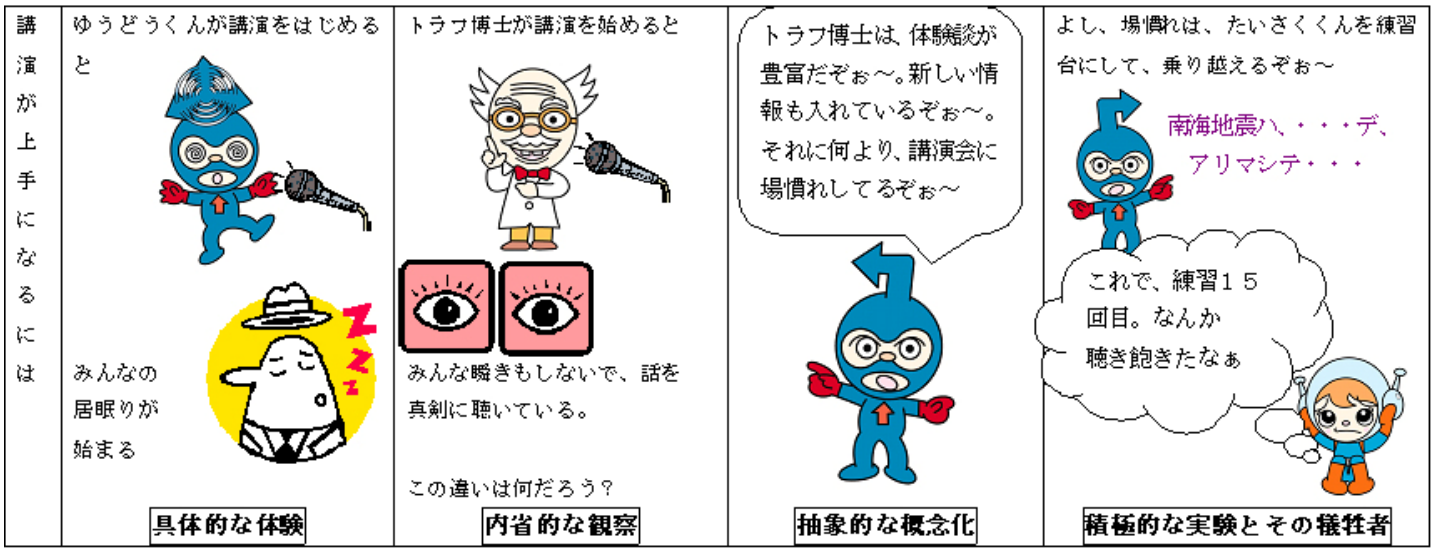
「体験的に学ぶ」というと、具体的な個別の事象ばかりにとらわれているのではないかと思われがちですが、このようにきちんと段階を踏むことで、学習するひとり一人が、自分なりの仮説や理論を持つことができるようになります。その仮説や理論は現場で修正され、さらに連続的な学習につながっていくのです。つまり、体験だけではなく、それを自分で考える過程というのが，実は体験学習のポイントなんですね。

「本当のところ、自分ならどうするか。帰り道で考えてください。」とクロスロードのルールに書いてあるのは、こんな意味があるんですよ。



講演が上手になるには

高知県防災キャラクター©やなせたかし



ファシリテータ進級認定！

以下の方を**中級**に認定いたしました。(敬称略)

大分県東部保健所　国東保健部　佐伯　久

以下の方を**上級**に認定いたしました。(敬称略)

岩手県立大学　　伊藤　英之

【応募先】108-8345
港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部　吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局
電話：03-5427-1251　ファックス：03-5427-1578
メール：kiikkawa@aoni.waseda.jp

電子投稿はこちら↓
http://maechan.net/crossroad/toukou.html

横浜市職員研修で300人がクロスロード

2010年2月8日～2月10日午後横浜市係長承認予定者危機管理研修が横浜市民防災センター１階体育館で横浜市危機管理室・人材開発課の主催により開催されました。その中になんと！クロスロードが採用されましたので、ご報告します。

それぞれの日の13時～17時の間、50人ずつの2班に分かれて、1日100人、3日間で300人が受講するという大規模なものでした。

写真をご覧下さい。体育館のように見えるこの場所を半分に区切り、2班のうち1班は最初にAEDの使い方など救急救命訓練をしてからクロスロード、もう1班は最初にクロスロードを行ってから救急救命訓練という順序で行われました。

問題は神戸編・市民編・横浜市編を混ぜたものを100分ほどかけて議論しました。

進行は安全管理局の方によって交代で行われ、非常にお上手でした。各テーブルではいつもながらの、楽しく、かつ、真剣な熱い議論が戦わされました。

このように職員研修でクロスロードをお使いいただいているところが増えています。東京都多摩市では、2006年から毎年実施されており、京都府亀岡市では全職員対象に実施とご報告をいただいているところです。

「うちもやってみた！」といわれるところは、事務局に是非ご一報ください。